皇居内の水生植物

大 滝 末 男

はじめに

皇居は平安朝末期に江戸四郎重継が、標高30~40mあ る武蔵野台地 (淀橋台) の東端部に館を造営、室町時代 中期に太田道潅が築城したところである(1457長緑元年)。 1606 (慶長11) 年頃の道潅濠は外濠で、荒川や東京湾に 近接しており、三代将軍家光の1638(寛永15)年頃になっ て、周囲は巴型状に外周約15㎞にも及ぶ三重の濠に囲ま れ、ほぼ完成してこんにちのようになった。現在の皇居 は、東西約5km、南北約4km、総面積約88ヘクタールで ある。1590 (天正18) 年8月1日に家康が江戸城に入城 以来265年間、江戸幕府の居城であった。1868 (明治元) 年以後は天皇家の居住地となり、皇居という名称は1890 (明治23) 年以来のもので、現今では都心部にあたり、 周囲には次第に高層建築物が林立しつつある。このよう なコンクリートジャングル化された都心にあって皇居だ けは、僅かに貴重なオアシス的存在になっている。周囲 はすべて外濠で囲まれ、内部は巨大な森林で包まれ、皇 居内を外部から伺うことができないだけでなく、平素は 宮内庁関係者と特別の許可を受けた者以外は、立入りが 禁じられ、厳重に警戒されていることは御存じの通りで ある。

さて、私は高校教員の現職のとき、日本生物教育会主催の東京大会の折、1965(昭和40)年と1980(昭和55)年の2回にわたり、宮中三殿に隣接する生物学御研究所を、短時間ながら見学する機会があり、その折内濠の一部も団体行列しながら遠望できたにすぎなかった。

しかし、生物学者でもあった昭和天皇は、皇居内のテニスコートや馬場などの施設を除去し、鋭意自ら武蔵野の自然の復元に努力なされており、また、下記のような書物も出版なされているので、一応私はその程度の認識しかもっていなかったにすぎない。

1. 水生植物の調査

皇居は私にとって上記のようなところであったが、昭和62年9月16日付、宮内官庭発第47号にて、私に下記6ケ所の内濠の水生植物について、一年間の予定で調査依頼があった。調査は私の考えで同年9月下旬と翌年の6

月及び、8月初旬に各2日間ずつその他を利用したが、その場合桜井義雄、浜島繁隆両先生及び下記の会員の協力が得られたので、曲りなりにも、大任を果たすことができた。また、庭園課の職員はボートや和舟を用意下されたり、盆栽園そのほかもご案内され、見学する機会を与えて頂いたので、概略現状を把握することができ、大略発表できるしだいである。

私にとって、さらに幸運なことには1989 (平成元)年 11月30日に、保育社から生物学御研究所編「皇居の植物」 なる昭和天皇最後の著書が発行され、その中の一部(21

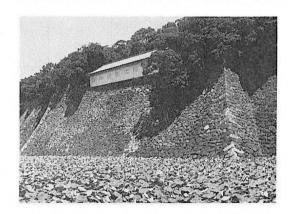




写真1(上) ハスが密生する蓮池濠の中央部(建物は富士見多聞櫓)、1987(昭和62)年9月29日

写真2(下) 蓮池濠の水草調査.(左)大滝末男(右)木村 雅宥宮内庁庭園課 課長補佐(現課長)(後方建物は富士 見櫓) 1987(昭和62)年9月29日 ~23頁)に私がまとめて報告した内容も網羅されている ので、この著書も参考に以下にまとめると次のようであ る。

皇居の植物は維管束植物について、野生種618、栽培種738、帰化種114、総計167科1470種述べられている。 この中に記載されている水草類は70余種であるが、その半分は記録的なもので、現存はしていないと考えられる。 表1に6ケ所の内濠で観察できた水草類をまとめる。 (帰) ……帰化植物、(自) ……自生植物、無印 ……栽培植物(献上植物を含む)

◎沈水植物……………6科6種

イトタヌキモ(自)、イトトリゲモ(自)、オオカナ ダモ(帰)、ホザキノフサモ(自)、ムジナモ、シャ ジクモ(自)

◎浮葉植物…………2科2種

アサザ、ヒツジグサ

◎抽水植物…………12科12種

イネ、イボクサ(自)、エンコウソウ、オモダカ、オラ

2. 表1以外の地域で観察できた水生植物

表 1. 内濠 6 ケ所の水生植物(15科24種) (+++……多産 ++……やや多い +……少量 (+)……ごく僅か -……存在しない *……帰化種)

					1,7 1	ECAVI A	719 11112
	和名	吹上	道	潅	潑	蓮池濠	乾濠
	10 43	大 池	上	中	下	建化橡	TG 18K
沈	イトモ	_	(+)	_	_	_	
水	エビモ	_	+ +	+	_	++	_
植	カズノゴケ	_	+	_	_		
物	<i>N N N N N N N N N N</i>						
浮	ヒシ	_	_	_	+++	++	_
葉	オニビシ	_	++	_	_	_	_
植	ヒメビシ	_	. + +	_	+	+	_
物	西洋スイレン	_	_	_	(+)	+++	_
	ハス	+	+++	+ + +	_	+++	
	ョ シ(アシ)	_	+++	+ +	+++	++	-
抽	マコモ	_	_	_	-	+	_
Ιш	キシュウ			N ,- 17 N			
	スズメノヒエ*	_	_	_	_	+++	-
水	フトイ	-	_	(+)	+	+	_
	ウキヤガラ	-	_	(+)	_	-	-
植	ミクリ	_	+	_	-	-	_
IIE.	ヒメガマ	_ `	_	(+)	_	+	_
	ショウブ	_	_	+	+	+	_
物.	キショウブ*	+ +	_	+	_	_	_
	セリ	+	_	_	++	_	_
	イボクサ	+	_	_	_	_	
_	ウキクサ	-	+	_	_	+	-
浮	ヒメウキクサ	-	+	-	-	++	_
漂结	アオウキクサ	_	-	_	+++	+	_
植物	ヒナウキクサ	_	+++	_	_	+++	(+)
物	サンショウモ	_	+++	_	_	_	_
\Box							

ンダガラシ (帰)、カキツバタ、コウホネ、コガマ、 コナギ(自)、ザゼンソウ、マツバイ(自)、ミズキ ンバイ

<付>目立つおもな湿性植物………約20種

アメリカセンダングサ、イヌキクイモ、カンエンガヤツリ、クサヨシ、サヤヌカグサ、スギナ、ダンドボロギク、チョウジタデ、ツリフネソウ、ヌマトラノオ、ハンゲショウ、ミゾソバ、その他ハナショウブ類

3. 感 想 (順不同)

- ① 皇居内の植物情報は、いままで水草類だけの調査 資料が見当たらないので、この調査報告は不完全な から唯一となるだろうが、現状は概略上記のような 結果であるといえる。
- ② 江戸城のような平城は、構築にあたり、土盛りをする必要から、当初かなり深い濠(10m以上)を掘ったところもあると考えられる。明治中期まで一続きだった道潅濠も太平洋戦争当時、紅葉山に地下防空濠を掘ったこともあり、現在では3個に分断されたり、どの濠も土砂が流入してヘドロが堆積して水深が浅く、沈水植物の生育には不向きで、前述のように沈水植物は極めて少ない。
- ③ ウキクサ類やヒシなどは荒川や印旛沼あたりから、 もっぱら渡り鳥によって侵入してきたものと考えら

れる。

- ④ 乾濠や環境庁の管理下にある各外濠には、水草類が皆無状態になっているが、その最大原因は、不見識にも草魚の稚魚を多数放流したことによるものであることが判明している。
- ⑤ 皇居内外の濠の水は、従来玉川上水や堀井戸水によるものだったが、近年皇居周辺にも地下鉄が発達し、水の補給が十分でなくなってきたことも、水草類の生育にマイナスになっているようである。
- ⑥ 内および外濠のヘドロを除去することを念願するのは、筆者ばかりではないと考えられるが、それには○○億もの莫大な宮内庁や環境庁への国家予算を必要とする。しかし、戦闘機を2~3機つくる軍事費を控えれば、決して不可能なことではないと信ずる。ここに善処を切望してやまない。

最後になったが、今回の調査に際し、御協力下さった水草研究会会員の桜井義雄・浜島繁隆・松田仁松・ 大橋利明・原 茂樹・保坂三継および宮内庁庭園課 の諸氏に対し、深甚の謝辞を申し上げる。

<おもな参考図書>

1	「皇居の四季」	学 研	1977年10月
2	「吹上の自然」	朝日新聞社	1980年3月
3	「皇居の植物」	保 育 社	1989年11月

OINTECOL 1990

8月23日から30日まで第5回国際生態学会議(INT ECOL)が横浜市で開催された。世界各国から1500人余りの参加があり、連日、熱心な議論や研究交流が行なわれた。水草関係では"Ecology of Submersed and Floating Aquatic Vegetation"と題するシンポジウムがもたれた。いろいろな外国研究者と意見交換ができ、また今後の協力についても話し合えるなど参加者にとって有意義な1日であった。日本からは下記の5題の講演があったが、総合討論の時間もこれらの講演をめぐって白熱した議論が展開された。日本で現在行なわれている水草研究が世界に通用するという自信がわいてくると同時に、今後どのように我が国の水草研究を進めていけばよいのか、最近、若手の研究者が少ないだけに、今が頑張り時との思いも強い。

今回のシンポジウムにおける日本側の講演を記録して おく。

Ikusima, I. & M. Kurihara: Ecological Behavior of a Waterchestnut Stand in an Eutrophic Lake.

Kunii, H.: Habitat Segregation of Floating-Leaved Aquatic Macrophytes.

Kadono, Y.: Adaptive Radiation of Japanese Potamogeton.

Nohara, S.&T. Tsuchiya: Annual Changes in Surface Cover of Floating Leaved Plants.

Tsuchiya, T.: Leaf Life Span of Floating-Leaved Plants.

(角野康郎)